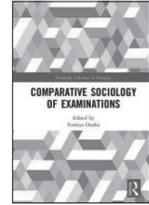


Fumiya Onaka (ed.) 2019

***Comparative Sociology of Examinations.* Abingdon:  
Routledge.**

(Routledge; 2019年3月 346頁)

尾中 文哉



本書は、2019年における「試験の比較社会学」の到達点である。筆者が編著者となっているが、実際には、試験と比較社会学に関する研究の諸潮流を示すことが主な役割である。それらを整理すると以下のとおりである。第一に、国際社会学会の比較社会学部会(RC20)での発表を起点とし、部分的には雑誌 *Comparative Sociology* 14.1 (2015) の特集を経て、本書にも収録されることになった諸研究(4 [日米仏イランの国語入試問題に含まれる ability の類型学(渡邊雅子)]、5 [明治初期日本と19世紀米の小学校の大規模テスト(橋本昭彦)]、7 [日英脱製造業社会における試験と ability (相澤真一)]、8 [日英タイにおける11-18歳時試験関連記事の推移比較(尾中文哉)]、14 [南タイのイスラム寄宿塾における試験(尾中文哉)])である。12 [ポーランドの国語試験 matura の歴史(Lukasz Remisiewicz)] も、この雑誌特集を読んだ研究者から寄せられたものである。第二に、2015年日本教育社会学大会での分科会を起点として本書に収録されることになった諸研究である(6 [日米の統一入試における歴史的知識・思考力(中切正人)]、11 [都内私立高校生の入試意識(Guillaume Albert)]、13 [シンガポールの選抜における“merit”(Sim Choon Kiat)])。第三に、90年代末から2010年代半ばまで続いた、教育学者・社会学者からなる試験研究会の流れである。ここでは科研費による研究プロジェクトが数次にわたって行われ、密度の高い外国・国内調査が行われた。直接的には10 [2000年前後の日韓入試改革(尾中文哉)] がそれを反映しているが、その影響は、5、8や9 [日韓における11-18歳時試験関連記事の推移比較(尾中文哉)] など他の章にも色濃い。第四に、1980年代に起こり現在も続いている比較社会学の流れである。この流れには広範な対象についての時系列記述に基づき国家・市場・文書などの普遍的要因を索出するものと、時点・対象を限定して特殊的要因を示すものがあるが、前者は2 [非近代の試験(尾中文哉)]、3 [近代の試験(尾中文哉)] に、後者は1 [二つのタイ村小学校の標準テスト成績(尾中文哉)] および4~14にあらわれている。第五に、現代女性キャリア研究所における流れである。たとえば、これまで女性受験生に対し大学医学部がどのように考えてきたかにもみられるように、また岩田正美・大沢真知子編(2015)『なぜ女性は仕事を辞めるのか』の資格の章にもみられるように、試験は、女性のキャリアを考えるうえで外せないテーマの一つであり、全体にわたる関連論点の提示が同種の研究の中で特色となっている。第六に、国際社会学会の社会学方法論部会(RC33)を中心としたプロセス志向的方法論の流れである。例えば、医学部入試に関わり再度重要性が強調されている「公平性」についても「インフラ」というような固定不動的構造概念でとらえるのではなく、不断に漸進変化する過程として捉えていくのが適切、という立場であるが、これはたとえば2,3,8,14の基礎となっている。第七に、アメリカ社会学会の比較歴史社会学部

会などにおける、「軸の時代」に注目する最近の流れも継承している。これは、明示的には序、2とあとがきに表れており、紀元前後の世界各地における試験の萌芽の簇生や現在の各国における類似試験改革の同時発生を捉えようとしている。本書とそれが開示する試験観は、「現代女性とキャリア」研究の地球規模の広まりにも役立つと考えられる。

(おなか ふみや：日本女子大学人間社会学部現代社会学科教授)